

淡江社だより

第3号
平成17年6月発行

一本の毛

乾 長 江

私が書の道に入ったのは、父淡江が死去してからである。昭和四年の春である。法政大学の経済学部で小野武夫先生に農村経済史の指導を受けていた。当時法政には母（玉江）が指導する法政大学書道会があった。会長は小野鍾山先生、顧問は野上豊一郎先生であった。私も書道会々員となって、母玉江に師事し改めて書法の第一歩からの指導を受け



たのである。

尤も幼い頃から父が門下の指導をするのを見ていた私は、門前の小僧であったのである。知らず知らずの間に書法

とは何であるかに触れていたようである。父から直接稽古を受けたのは、小学校から中学の初めのように思う。その頃は余り熱心ではなかった記憶がある。

法政の書道会の最初の稽古場は、三宅坂の足立時郵氏のお宅の一室を借りて居った。今の国立劇場の南隅に当る。そこに十名足らずの会員が集まった。

母玉江の前に正座させられて、前方から私のもつ筆をつかまれて引きまわされた。実に厳格な折目正しい稽古であった。

以前に少しは筆をもったことがある私は少しは書けるつもりでいたが、なかなか思うように動かないのである。こんなはずではないと思いつながら、何回となく筆を擱いてはまた執ったのである。

筆管のたおれも筆毛の乱れも、このような稽古をしてみると、自分自身のからだ（体位）のねじれであり、心の乱れとして受けとれるようになっていったのである。

筆の鋒先の先端の毛一条すぢにかけられる荷重が、筆毛全体を集めもし乱しもすることを、繰返し繰

返し見せられた。目には見えても、頭では理解しても、なかなか思うようにはならなかった。ほんとうに技を手に理解させることの難しさを泌々と味わわれたのである。

これは手先で捕えるものではなく全身でつかむものであることを意識しはじめた。そして、全身は全心的であり全霊に通ずるものであることを知ったのは、大分後のことである。

今でも、母の口癖の「一本の毛」が思い出されるのである。

（註）この遺稿は草稿のかたちでみつかった原稿をそのまま掲載しております。



人に会う(第一回)

西岡 青溪

人は誰方でもその人生に於いて人に会い、大切な師に出会うという経験をお持ちのことと思われるが、ささやかな吾が足跡を振り返ってみても、やはりその節目に於いて必要な人との出会いがあったと思う。それはおぼつかぬわが書の歩みに限つてみても例外ではない。人事の上に天命ありと大袈裟なことを云うつもりはないし、勿論その資格もない者であるが、今日まで生かされて来た事実の上には何か目に見えぬ上よりの力があつてのことと思われ、ひそかに敬虔の念に満たされるものである。

奈良の片田舎の小学校で五・六年の担任であつた西内義一先生のことには忘れられない。毎年の年賀状を楽しみにしていたが、一昨年遂に天寿を全うされた。師範を出られてまだお若い元気一杯の先生であつた、あれは何が原因で叱られたのか忘れたが、クラス全員椅子を頭上に差し上げて立たされた。腕がだるくなつてもなかなか許して貰えなかつたことを覚えている。

先生は正規の授業をやりくりしてよくお話をし下さつた。その日は海軍記念日だつたらうか、東郷大将の日本海海戦物語で、黒板が忽ち日本海に早変わりし、バルチック艦隊を迎え撃つ三笠を旗艦とした日本海軍が、皇国の興廢この一戦にあり

各員一層奮励努力せよ、の号令のもと敵前反転の勇断で完勝した。丸坊主の腕白共が掌に汗して聞き入つた。

西内先生は又書道の先生でもあつた。背後から筆を持って指導して下さり、先生のふつくらと柔らかな手が目の前にあり、今でも鮮明に残つていて忘れられない。そういう先生が好きであつた。教室に貼り出されるのも楽しみであつた。時は將に軍国時代皇紀二千六百年で日本中が沸き上がつていた。県央に樞原神宮があり建国会館という大きな建物があり、そこで県下の小学生の書初大会があつた。クラスの友人と共に出かけに行き「輝く御稜威」と清書したのもなつかしい思い出である。以来何となく書は好きな学科であつた。

中略、知人の紹介と先輩諸氏の実績のお陰で、恵泉女学園本部に勤務することを得た。我流ながら合格発表や各種案内等を書いたりしていた。ほぼ十年位経つた頃であらうか、或る日、乾節子先生から突然「あなた卒業証書を書いて見ませんか」との御言葉があつた。学園創立者河井道先生をずっと助けてこられた、恵泉書道の大先生からそういう御言葉をいただくとは、まさに晴天の霹靂であり、とてもとてもと固辞をした。先生は「弟が下落合で教室を開いていますから、稽古されては如何ですか。」と静かに仰言られた。書の方には稽古という言葉があるんだと知り、学生時代剣道の稽古でしぼられ苦しんだ事を思い出し、少し心が開かれ一

種のなつかしさと同時に若返つたような新鮮な氣を与えられたことを覚えている。

先生は近くご定年を迎えられることになつており、学園の後事をこころ配されてのことであつた。毎年夏休みを返上され、暑い職員室で肩を凝らして卒業証書を書いておいで先生の姿を拝見している。

思うに自分には積極的に師を求めて書を学ぼうとする氣概がなかつた。かといつて現状に満足しているわけでもなく優柔不断なぬるま湯にたつているような状態であつた。

機を見て敏なるお計らいというか、時宜に適した節子先生の御言葉は、未熟な小生の力量と性格まで見抜かれてのあの一言で、学ぶべき絶好の機会と、進むべき道筋まで見事にお示しいただいたものであり、今も深く感謝し、心より御礼を申し上げるものである。

初めて長江先生に拝眉を得、門に入ることを許された。基本筆法から始めさせていただき、文字通り四十の手習いの第一ページが開かれたのである。



入門の時のこと

松原白葉

私が淡江社に入門したのは、季節は忘れましたが一九七〇年でした。十二年間通った修道院のような女子校を出て、晴れて共学の大学に入学した年のことなので、よく覚えています。

その女子校の庭には軍旗を抱き天を仰ぐジャンヌ・ダルクの像があり、そういう勇ましい女子を育てるのかと思ったら、全くの良妻賢母教育で、異端児の私は先生に叱られてばかりでした。大学には何かおもしろいことがあるだろうと期待して入学したものの、一年目は大きな階段教室で行われる一般教養の講義を聴くだけでした。何メートルも向こうに教授の顔が小さく見え、実感のない淡々とした時間が流れていたように思います。

新しい友人のK子さんとはクラスも部活動も帰り道も一緒でした。彼女は鳥取の出身で、向学心のあるまじめな人でした。東京での四年間がいかに人生の貴重な時間であるか自覚していたようでした。わたしにとっても同じなのですが、東京出身の私は不覚にも高校の延長のような感覚で過ごしていたのです。

学生生活にも漸く慣れてきたある日、彼女が「今日は帰りに寄るところがある」というのです。限られた四年間にいろいろ身につけようという心構えの彼女は、担任の教授に書道の先生を紹介しても

らい、通い始めていたのです。私は彼女の行動力に少し後れを取ったような気がして、そのまま、彼女の後に付いて行ったのです。それが長江先生の自宅に伺った最初の日です。

落合のお宅の玄関をガラリと開けたときから、空気が違っていました。神聖な場所に足を踏み入れた時のような快い緊張感が漂っており、清らかなしづらえ、きちんと並んだ履物、十八才の未熟な私でしたが、これは何か違うぞと直感したのです。

稽古は一对一、文庫机を挟んで対峙します。他人はきちんと正座をして、自分の番がくるまで静かに練習をしていました。私語を交わす者はなく、さらさらという筆が走る音だけが聞こえていました。

先生のご指導は、朱で添削をするだけでなく、手本をすべでもう一度目の前で書いて見せてくださるといふものでした。生徒はそれを見て、筆の運びや速度、間を学ぶのです。時間も掛かるし、先生の労は大変なものでした。初歩の者には筆に手を添えて、正面にいる生徒が書くように、一緒に筆を動かしてくださいます。つまり、先生からは逆向きに書いていくことになる訳ですが、信じられないほど整った字が書けるのです。まさに神業です。

先生のご指導と教室の雰囲気感動した私はその場で即、入門を申し出たのです。

紹介状も持たず、いきなりやって来てよくそん

なことを言ったなと、今思い出しても顔から火が出る思いです。

先生はすぐに御答えになられませんでした。なにしろ押しかけ入門ですから、先生も困惑されたのだと思います。微妙な沈黙の後「それでは、来月からでも来て見ますか」とおっしゃいました。「いらっしゃい」とはおっしゃらなかったのです。

こうして翌月から私の稽古は始まりました。あの日、私は唯K子さんの後について行っただけで、書道を習おうとして行ったわけではないのです。もし、長江先生が合気道の先生でも私は入門していたと思います。とにかくこの先生についていると思ったのです。

先生は私にとってすべての面で師であり、父であり、お手本でした。書を通して普通の真理を教えただけではありません。先生に出会えた十八才のあの日のことを、恥ずかしいけれど、私は一生忘れません。

まじめだったK子さんは卒業後故郷に帰ってしまいましたが、押しかけ入門の私は結婚、出産、転勤を乗り越えて今日に至っています。



長江先生を偲ぶ

乾 たみ

今年の二月二十三日は気象予報通り春一番が猛烈に吹きあれた日です。私は自室から見える杉の森や竹林が大ゆれにゆれているのを眺めていました。その時電話です。金丸さんからでした。淡江社だよりに一文を書く様にとの事でした。金丸さんの上手な交渉にのせられて、ハイと返事をしてしまったのです。さて困りました。しばらくペンをおいて考える事にいたしました。

三月十八日になりました。私が今一番のべたい事は、淡江社の皆様にありがとうございますと御礼を申し上げたいことです。

長江が亡くなりもう十一年になります。今まで淡江社をよく支えて下さいました。そして来年の翰墨展は長江生誕百年記念としてその遺墨を展べると云う計画をすすめて下さっています。準備のために時間と労力を惜しみなくささげて下さる委員の方々から感謝申し上げます。

ところで昭和二十三年(一九四八)乾丈夫と私は原町田教会に於いて結婚式をあげました。二十四年長男が、二十六年に長女が生まれました。乾は既に書家として長江と号し、花押も使っておりまして。しかしあの太平洋戦争の東京大空襲(一九四

五)で研究資料を家財もろとも全て焼失してしまっていました。家計を支えなければなりません。やむなく会社づとめについたのです。

昭和三十七年、東洋大学文学部第二部の講師として就任いたしました。書道史、書論、書道実技、書道教育法と、大変ハードな講義を受け持ったものです。しかしその年月の間も淡江社を再興すべく努力をつづけて参りましたし、慶応の学生のためにも時間をさいて参りました。

昭和三十九年、会社を辞し、最初の個展を竹川画廊で開いたのです。それと同時に中落合の家での個人指導が始まりました。それからの長江は大学の講義の準備と共に夜を日についてほんとうによく書きに書きました。稽古にみえる一人一人のためにその進度に応じて直筆手本を毎週一人宛半紙四枚以上でした。稽古半ばで地方に移られることになりました方(当時、聖母病院の事務長でいらしたシスターユリアナ)は「長江先生のお手本が行手に一杯になりました。」と私に語りました。昭和五十年頃のことです。続けられた方はもつともつとたくさんお持ちでしょう。

翰墨展の思い出はたくさんあります。

第四回翰墨展の長江出品作品の「葛覃」には、葛の葉の繁るさまに、勢いの出てきた淡江社の姿が重なりました。第十四回展では芭蕉の句「五月雨を……」を書いています。五月雨を集めて大きな流となるさまを思い、淡江社がここまで育って来た事の

よろこびの表現だと私に語った長江でした。

第十八回翰墨展の作品は大同一以の「遺傷」と山頭火の「昭和悲歌」でした。この作品に私は悲しくも強い印象を与えられました。長江はこれが最後の作と考えていた様でしたから。昭和の時代をきびしくも力の限り生きて来ました長江でした。戦争にいためられた同胞を思い、自らの生涯と重ね合せて思い、昭和という時代を悼む気持ちを作品として表し、区切りをつけたかった様でした。この頃彼は体力も衰えて来ましたが、既に講師に指導を委ね、淡江社はもう大丈夫、バトンをしっかりと渡したという気持ちの様でした。あの作品の最後は、山頭火の句をかりて「てふてふひらひらいらかをこえた」でしたでしょう。「みなさんさようなら、あとはよろしく頼みます」とあれは重荷をおろして心軽やかに飛翔する長江の心象風景です。

その後、書見はしてもほとんど筆をもたず「百芝山房」と自称する質素な部屋で静かに過ごしておりました。ところがです。次の回の翰墨展(第十九回・米寿記念展)の時がやって参りました。私は彼の体力では無理だと思っておりましたのに「書く」と申します。「今を与えられて、生命ある限り書かねばならぬ」との意気込みです。彼は生かされた神の恵みを感謝して「神は愛なり」の「愛」一字を太筆で大きく書きました。それと同時に大同一以の「遺傷」も発表しました。二作品とも再び彼の心象風景を強く感じさせられた作品でした。亡くなる

旬日前、「あの『愛』は椿先生（日本キリスト教団武蔵野教会椿憲一郎牧師）のところにお届けしなさい」と云いつけられ私はその様にいたしました。

平成六年七月十八日朝、静かに息をひきとりました。彼はキリスト教徒でした。

後に親しい中国人日教授は「尊敬する乾長江先生『正寝寿福』と伝えて下さいました。

平成十七年三月十八日 榛名にて

◆参考

長江が直筆手本として各人に与えたもの

基本筆法	半紙	75枚
草千字文全文	半紙四字	250枚
"	半紙八字	125枚
隸書千字文	半紙四字	250枚
琵琶行全文	半紙八字	71枚
前赤壁賦	半紙八字	91枚
後赤壁賦	半紙八字	46枚
西嶽華山碑全文		93枚
孔宙碑		47枚
史晨碑・前・全文	半紙十字	52枚
" 後・"	半紙十字	43枚
礼器碑全文	半紙八字	69枚
乙瑛碑全文	半紙八字	76枚
書譜全文	半紙八字	466枚
その他、石鼓文、千字文篆書		
かな鹿鳴集抄、などなど		
自由研究指導		

規矩準繩（孟子離婁篇）

りろう

乾 長江

二十年あまり前にもなろうか、私は植物の繊維で筆をつくってみようと思った。むかし神社などで藁筆でのぼりばたの字を書いたという。私はこれに倣って藁筆を自分でつくってみた。

幸いに材料は新潟の農業高校の先生A君の協力で手にすることが出来た。花の咲く前のしなやかな稲の茎をよくほして、晒すのである。しかし筆は「ささら」や「ほうき」とちがひ、尖・円・斉・健の四つの条件がある。試行錯誤の末、大中

小の三本のわら筆が出来た。結果は意外に上出来であった。確かな手応えがあり鋒の弾力も開闔もまずまずであった。羊毫や兔毫とは全く異なつた野趣そのものである。剛直な感触である。ものには夫々の特質がある。却々面白い。作品

「規矩準繩」はこの手づくりのわら筆によるものである。

（昭和六十二年十二月二十二日）



書との出会い(第三回)

大岡 瑛川

軍隊生活

「淡江社だより」第二号では、昭和十九年五月召集により佐倉の東部六四部隊に入隊した所まで書きました。

入隊後一週間で、私達は旧満州の北の端、黒河に近いソ満国境の山の中に在る九七部隊（東京の麻布三連隊）に送り込まれました。初年兵達は、毎日演習や馴れない内務班の生活に追いまくられて、たまに故郷へのハガキを書くことを許されても、「当方元気で軍務に精励しておりますから、ご安心下さい」と決まり文句を書くのみで、凡そ書などは縁のないものでした。

それでも、一年三ヶ月の軍隊生活で、種々の状況下、上官の命により筆を持つ機会も数回ありましたが、ここでは省きます。

戦い敗れて

昭和二十年八月、終戦となり、満州では侵攻して来たソ連軍の前に、矛を捨てる運命となりました。一般的には、ソ連の捕虜となったと云われますが、その時、新京の陸軍経理学校の学生であった仲間の中に、「我々は戦争が終わった後に、理不尽にも強制的にソ連国内に連行され、労働させられたもので、捕虜ではない。強制抑留者と云うべきだ」と真相究明に執念を燃やしている八十八歳の老兵がい

ます。彼は入院中も病床でワープロを打ち続け、昨年から「告発シベリア抑留」「真相シベリア抑留」——ヤルタ協定に基づく現物賠償であった——と云う本を相次いで出版しています。本題とは外れますが、彼の熱意に敬意を表してご紹介いたしました。シベリア越冬初年

この秋には、私達候補生五十名程を含む五百名の労働大隊は、黒龍江を渡り、対岸のブラゴヴェンチェンスクより約七〇km奥地のノウォ・アレキサンドロフカのソフォーズ（国营農場）に着きました。早速農場に出て、主として馬鈴薯の収穫をやらされました。

十一月中旬、早くも襲って来た寒さに、震え上がっている頃、候補生二十名を含む計四十五名の分遣隊の一員として、近くの穀物倉庫に移り、翌年五月まで大豆・小麦の受払、管理の作業に従事しました。最初の冬から春にかけて沢山の犠牲者が出た中で、私達は、監視の目を盗んで、無断頂戴して帰った大豆で、全員命を繋ぐことが出来たことは、まことに幸運でした。

その後も、近辺の部落（コルホーズ）を移動しながら、主として農作業に従事して、入ソ後二年近くになりました。

帰国始まる

昭和二十二年の初夏の頃から、今まで何回も噂に騙されてきたダモイ（帰国）の動きが、現実化しつつあることがわかって来ました。

私達も、この秋の収穫を終え、帰国できることになり、結氷したゼーヤ河を渡って、ブラゴヴェの街中の収容所に集結しました。一千名の梯団は、十一月十日頃 愈々ナホトカ港に向けて出発しました。私達にとっては、初めてのシベリア鉄道の旅と云っても、雪の原野、森林地帯をダルマストーブ一個で暖をとりながら貨車に揺られて、ひた走るので、外の景色を楽しむ余裕などありませんでした。待ち焦がれた故国への帰還第一歩と思えば、嬉しくない筈がないのですが、未だ何時、何処で下ろされるかもしれないという不安は打消すことが出来ませんでした。

五、六日走ったところで、日本海のキラメキが、左側の樹林を透かして見えて来た時の感激は忘れられないものでした。

ナホトカ 越冬

ナホトカ到着と云っても、駅舎もプラットホームもなく、港を隔てる岬の見える白い砂浜に下り立ちました。砂浜に続く海岸にある、第一、第二分所に入って帰国手続きをし、第三分所に移って、翌日港まで行軍して、船に乗込むという手順なのです。

三日目の夜、第二分所にいた私達に、半数は帰国、約十名はこの勤務兵の交替要員、残りは近くの山に入って来春まで森林伐採と申し渡された。不安は現実となりました。

私は、第一分所の炊事へ配属されました。間もな

く十二月三日の最後の帰還船が出て行き、ナホトカの三つの収容所は越冬体勢に入りました。

翌年昭和二十三年二月に入り、鉄道線路より山側の方に、第四分所が開設され、私はこちらの炊事の庶務係となつて、春の輸送再開の準備を始めました。

五月三日、第一船が入港し輸送再開。その前から、帰国集団は次々と到着し、各分所は、連日、三々四千人が滞留し、一船毎に二千人を送り出すという忙しさで、炊事もフル回転でした。

看板製作

その頃、収容所の管理部から、炊事場の入口に看板を掲げるように指示がありました。私は、支給された厚板に、文字の縁を浅く彫つて緑色の絵の具で「炊事」と表示し、その下にロシア文字で「クーフニャ」と黒く併記したものを作りました。当時刻字の知識も経験もなく、ただ何とか看板らしきものをと工夫したつもりですが、今見れば、お恥ずかしいものでした。この時、彫刻刀や絵の具があったのは不思議ですが、恐らく出発前の税関検査で引っ掛かるのを恐れた、将校団の連中が残したものでしょう。

帰国

七月、私も帰国できることになり、二十六日、朝嵐丸で舞鶴に上陸、四年三ヶ月ぶりに無事故国の土を踏むことが出来ました。

写真発見

シベリアから引揚げて、四十年余、その記憶も次第に薄れつつあった平成二年「アルバム シベリアの日本人捕虜収容所」(朝日新聞社刊)という写真集が出版されました。その本の中で、一枚の写真が目にとまりました。「昭和二十三年ナホトカで」と解説にあり、建物の背後には、なだらかな丘が写っているの、第四分所に違いないと思われしました。しかもその建物の一つには、「炊事」と日口の文字の看板が掛かっています。一瞬目を疑いましたが、正しく私の作った看板です。よくこんな写真が残っていてくれたものだと思無量でした。

今回は、「書」に觸れる部分は少なく、自分史の一部のようで看板に偽りありの文になったことをお詫びいたします。

—朝日新聞社の許可を得て、写真の複写をお目にかけてます。—

以下次号



◇ 予告 ◇

■ 乾長江遺墨展

日時 平成十八年三月二十一日(火) ~
二十六日(日)

場所 東京都銀座画廊
銀座貿易ビル七階「E」

先生の生誕百年を記念してご生涯を通じての遺墨をおよそ百点展覽いたします。大作並びに卷子本等、今回は会場いっぱいに広げて展示する予定です。ご期待下さい。

■ 「日本の美術 書の流れ」

(戦後六十年の軌跡)

(美術年鑑社より本年八月発行予定)に長江先生の書が掲載されます。



書道教室ご案内

無理のない正しい筆使いで
字を書いてみませんか。

書についてお気軽に
お尋ね下さい。

ベテランの講師が基礎から
個人指導をしております。

稽古日 木・金・土曜日

(お問い合わせは稽古日に
お願い致します。)

淡江社

東京都新宿区中落合二一七―三
電話 〇三―三九五―一八一五二

編集後記

みどり繁る雨の季節となりました。
平成十七年度淡江社総会を無事に終え、途絶えておりました淡江社だより三号を皆さまにお届けできる運びとなりました。原稿をお寄せいただいた皆さまにあつくお礼を申し上げます。

長江先生が逝去され十一年目の夏を迎えようとしております。先生亡き後も淡江社が先生の精神を継承しつつ歩を進めてこられたのは、奥さまがこの号にお寄せいただいた原稿にありますように、先生が文字通り心血を注いで弟子の指導にあたってくださった賜物にほかなりません。

来春には先生の生誕百年を記念した遺墨展が盛大に開かれます。この現代社会にあつて先生の凛としてなお厳しい書が問う意味は大きいと思われまます。ひとりひとり微力ではありますが、遺墨展の成功に向け動いてまいりましょう。

この小誌も会員相互の親睦のよすがとして、先生のご希望により発行されました。皆さまからの原稿を引続きお待ちしております。(K・K記)

発行 淡江社

東京都新宿区中落合二一七―三
電話 〇三―三九五―一八一五二

印刷所 アサヒ印刷

山梨県韮崎市本町四丁目九―五六
西岡青溪・金丸紅花・松原白葉

編集委員 題字 武藤素英 カット 大岡瑛川